

「”舞姫”を通して鴎外が訴えたかったこと」

私がこのテーマを選んだ理由は、鴎外の生きざまを調べていたときに主人公である豊太郎と本当によく似ていたことに気づき

豊太郎というのは鴎外自身のことなのではないか、豊太郎という人物をつかって自分の今までの経験から得た”なにか”を

訴えたかったのではないか、と思ったからである。

私はその”なにか”を「中途半端に野心、欲望だけを追っても結局自分のなかに残るものは虚しさと後悔である。」という

ことであると考える。

豊太郎の行動から見ていこうとおもう。豊太郎は幼い頃から教養豊かで勉学の面では人並み以上の能力があった。周囲の人

に勧められるがままの人生を送ってきたため、決して道を踏み外すことはなかったのである。しかし、エリスと出会い恋に落ちたこと

で周囲の誤解を招き、これまでの豊太郎であればあじわうことのなかった免職にあらうなど大きく道を踏み外してしまった。

その後、エリスと同居し、子を授かったというときになって、大臣からのロシア同伴の誘いに容易な考えで同意してしまった。つまり

エリスとお腹の子を捨て自分の野心に走ってしまったのである。結局は自分の出世と名誉に目がくらんだのではないだろうか。

しかし豊太郎は、エリスのことを完全に捨てていたわけではなかった。それは最後にエリスが狂ったのは相沢のせいだとも

言える「されどわが脳裏に一点の彼をにくむ心今日までも残れり」という憎しみを込めた文からも読みとれる。エリスのことなど本当

にどうでもよかったのなら、エリスが狂おうがどうなろうが自分の野心に走った豊太郎には関係のない話であろう。エリスをおいて帰国

したが心のどこかでは中途半端にエリスから離れられないでいた。豊太郎には、「この弱くふびんなる心を」と述べているように、自分

でも認める心の弱さがあったため野心だけの中で生きることができなかった。もっと強い心の持ち主であったのなら自分の欲するも

のを徹底して追いかけることができていたはずだ。

私はここでもっと深く人生の中でいったいなにが大切かを考えていれば、名誉、出世だけでなくエリスとの関係、相沢との関係をも保つことが

できたのではないかと考える。大臣に誘われたときにエリスもいっしょに連れて行く

案やエリスと真剣に話し合うこともできたと考え
る。それができなかったのはやはり豊太郎の、意思を主張できない心の弱さではない
か。

この小説は途中までは鷗外自身を投影しているものであるといえる。しかし、その後
の豊太郎がどう生きたかということはかかれていない。

鷗外は、その後どう生きるべきかを案に読者になげかけているのではないか。欲望だ
けを追いかけて虚しさや後悔しか残らなかった人生の

その後をどう生きていくかが鷗外からのメッセージである。

私ならばまず相沢やエリスに謝ることからはじめ、自分の心としっかり向き合い自分
が選んで与えられた使命に懸命になることでこれまでの
の失態をつぐなっていくと思う。